

令和元年度機構評議会にて委員から寄せられた主要な指摘事項とそれに対する対応方針

	項目	機構評議会における指摘事項	対応方針
1	研究課題の設定	独創的な発想に基づいて、革新的な技術シーズを出すためには、個別研究への理解と支援が必要であると思う。	法人全体としては、中長期目標の達成に資する課題に重点化しているが、個別研究としては、独創的な発想に基づく科研費等の外部資金への応募も奨励している。また、交付金を原資とする所内プロジェクトでは、若手研究社育成を目的とする課題やFS課題も採択できるようにしている。
2	研究課題の設定	日本の現状にあった高性能林業機械の研究を進めて欲しい。	これまでも海外の林業機械を参考として、国内の路網整備状況、作業対象木のサイズ、作業道の規格等に適合した高性能林業機械の開発を国内の機械メーカーとともに進めてきた。今後予想される皆伐再造林作業の拡大に対応するため、専用機械だけではなく汎用性に富んだ機械、儲かる林業を支援できる機械、危険な作業の機械化等、日本林業の現場で必要とされる国産機械の開発を進めていきたい。
3	研究課題の設定	主伐・再造林というムーブメントが大きくなっていく一方で、どうやって多面的な機能や生態系保全と両立させていくのかということに対して、がっちり向き合って発信してほしい。	多面的機能の維持は森林資源の持続的な利用という点でも欠かせないと考えている。具体的な研究としては、山地において災害リスクの高い場所を精度よく抽出する技術、森林の多面的機能を林相や林齢、地形などから推定し地図上に表示する空間評価モデルを作成した。木材生産と生物多様性保全の両立をめざす保残伐施業の実証実験などに取り組んでいる。
4	研究課題の設定	カラマツの樹種としての期待が高まってくると、適地性とか、品種の特徴をふまえた造林技術の開発などの踏み込んだ技術がこれからは求められるのではないかと。	需要が高まるカラマツの持続的利用にむけ、交付金プロジェクトとして、本州におけるカラマツの造林適地判定、虫害・腐朽リスクの解明、北海道産カラマツとの材質比較に取り組んできた。また、北海道や長野県と協力しカラマツの着花促進や造林手法についても研究を行っており、特に現在は、カラマツの初期成長速度と雑草木の関係から低コストな再造林手法の開発を進めている。
5	データ共有	県などの公設試験研究機関等にもデータを共有できるようにしてほしい。	森林研究・整備機構では、研究成果のもととなった科学情報の公開に努め、森林・林業・木材に係る先導的な研究を促すことを目的に、研究成果の公開に関する基本方針を定めている(平成31年4月)。この基本方針では、将来的には、公設林業試験研究機関等外部機関から研究データの寄託を受けることも視野に入れた体制整備に努めることにしている。現時点では、データに応じた共有範囲の設定をはじめ解決すべき課題が多く、実現の具体的な時期は未定であるが、次年度の機構評議会では進捗状況を報告したい。
6	広報	NPOやボランティアなど森林に関わる者が一般の人に伝えやすい資料があると利用しやすいので、引き続き今後も分かりやすい資料、楽しく読める資料を提供してもらいたい。 エンドユーザーの所に届けるという視点を持って発信してほしい。	広報誌「季刊森林総研」では、「木を使って守る生物多様性」、「林業のいまを知りたい!」、「木材利用の伝統と先端」など、川上から川下をカバーする幅広いトピックについて特集を組み、森林・林業・木材産業を応援して下さる方々に役立つ情報を届けるとともに、ホームページやフェイスブックで広く紹介してきた。今後もこうした取組に努めて参りたい。 最近、改訂版を公開した「実用化カタログ」では、エンドユーザーとしての大学・公設試験研究機関・民間企業との連携強化を目的に、実用化された成果やすぐに実用可能な成果を紹介している。適宜バージョンアップしながら、より伝わりやすい形に変えていくよう努めたい。 今後も、成果の発信に際してはエンドユーザーを常に意識しつつ取り組んで参りたい。